

☆養護学校の日々

子どもが遊びを妨げられるとき



津 守 真

新学年が始まった四月から、五、六月を経て、一学期も終りに近づくと、子どもをも、自分をも、ゆとりをもって見ることができるようになる。新学年がはじまったころには、前年度からひきつづいた子どもも、前より行動が悪化したようにすら思え、この先どのようなのか、いつまでも同じ状態がつづくのではないかと、保育の日日を重く感じられることがしばしばであった。これ

は、たえず新たな事態に直面しながら成長する子どもの保育に、必然的に付随することなのだと思う。その停滞と前進の日日をくり返した後に、この時期のことを見直し、その中で積み重ねられている。子どもと大人の生活の基本的体験を考えてみたいと思う。

保育の記述

新学年度、四月の最初の日、T夫は部屋に入ってきて、おもちゃ棚にいった。前学期、母親から離れないことの多かったT夫が、この月、自分からおもちゃ棚へと歩いていったので、私はT夫が十分に遊べるようにしたいと思い、後についていった。

T夫は、電車の入っている籠から電車を出して棚にいた。次々に取出して三台並べた。T夫は私から離れて動きはじめていた。そこにH男がきて、T夫が棚に並べた電車のひとつをもつていった。T夫は電車をとられると泣きそうになって私の膝にくっつく。私が何か言ったので、H男はじきにその電車を棚においた。T夫はまたあそびはじめる。H男は、床に坐って、そこにある電車や自動車に、鉛筆で何か書きはじめた。T夫は、棚の上に、十台くらい、自動車を一列に並べた。H男がきて、自動車をとつてゆくと、T夫は私の膝にくっつく。こういうことを、数回くり返していた。

そこに、どのようにしてか思い出せないが、いつも小さい子どもの髪を引張るS夫がきた。はじめは何もしな

いでいい工合だと思っていると、突然、S夫はT夫の髪を引張った。私はT夫をかばう。T夫は私にびったりと抱きつく。そのあと、T夫は私にくっついて離れなくなってしまった。

保育に参与して子どもの行動を記述するときには、その記述が子どもの行動にとどまっていなくても、その背後には、保育者の能動的な思いがかくされている。それは意図というよりも、もっと広い意味で、子どもの生活が育つようにという能動的配慮である。私は、T夫が折角あそびはじめた電車や自動車を、他の子どもに何度も持ってゆかれ、そのたびにT夫は私の膝にくっつくので、これではT夫の自己実現の場とならないように思った。

ここに述べた子どもは三人であるが、T夫も、H男も、S夫も、いずれも十分にあそんでいない。それぞれの子どもが、いかにして自分の活動を見出し、あそぶことができるようになるかという保育の実践的課題がここにある。このような課題に対しては、どこにでも通用す

る一義的な解答を期待することはできない。日日の保育の、生きた多様な現象の中に身をおき、そのときの保育者自身の理解に従って決断し、行為し、そこに生れる現象を反省考察して、一步一步すすむよりほかない。

この月のことについて、最初からもう一度振り返ってみる。

電車を並べる

T夫は自分から部屋に入ってきて、電車のいれてある籠にゆき、電車をとり出して棚の上においた。T夫は自発的に電車に関心をもって玩具棚に近づいたのである。

T夫は、以前は哺乳びんを口から離さないことが多かった。それは、口唇の快感や母親の胸に依存して生活していたと云えよう。このときは、哺乳びんからも、大人からも離れて、自分から玩具棚にいったのであって、心が自発的に動き出している。心が内面で動きはじめたときには、内界に対応して、外界の対象にも、動く物を求める。

T夫は、目の高さに、電車や自動車を、一台だけなく、たくさん並べた。つまり、一台をおくと、次にもう一台を籠からとり出して、前の車の隣におく。次々に同じ動作をくり返す。同様のことが子どもへの描写にもみられる。描写の中で、しばしば、自動車の車輪がたくさんかき並べられる。子どもは自動車が車輪をたくさん持っていることを認識しているのではなく、スピードで走っている様子をかきあらわそうとしている。実際、私共も、子どもと一緒に道ばたに立ち止り、眼前を走り去る自動車の車輪に注目するときには、多くの車輪が重なり合っている。T夫が自動車をたくさん並べるのは、それによって動きの状態をつくっていると考えることができる。T夫は、新学期の最初の朝、自分から何かをしはじめようとする心が動いていたと考えてよいと思う。

物をとられることと大人の身体に接すること

T夫は、自分が並べた電車を他の子どもにとられた。いま自発的に心が動いて遊びはじめたとき、その玩具を

もち去られた。そのような意味のある物を取られることは、自分自身の世界の一部が空虚になることである。

空虚になった部分は、何か他のものによって補われなければならない。そのやり方は、子どもによって異なるであろう。T夫は、大人の膝にくっつき、大人の身体に接着することにより、その喪失感を補った。

これまでの類似の事態におけるT夫のやり方は、最初は、哺乳びんをくわえることであった。それから、大人の身体の中に侵入しもぐりこむかのように、大人に接着した。そして、大人の腕の中から離れない時期がつづいた。このように、外界に進出しようとしたときにひき起された喪失感は、身体的快感の獲得によって補充するものがT夫の仕方であった。

どうして、とられた物をすぐに取り返さないのでか大人はすぐに考え易い。不甲斐ないと思う。けれども、こうしたときの態度や行動の仕方は、人によっていろいろである。また、大人の腕の中に快感を求めるのは消極的だと嫌う人もいる。しかし、これは、空虚さをみたすた

めの、人間らしいやり方のひとつである。子どもは、決してその中にいつまでもとどまるのではなく、自分の力で外界に出てゆくときがある。

物をとられたとき、子どもの側には、喪失感を生じるのみでなく、他面、その物がなくともやってゆく自分自身の生活態勢をつくり直すことが必要になる。それができるまでは、子どもの内心に混乱が生じる。それを超えて、新たな自分自身をつくり直すことは、人間の初期の基本的体験のひとつであろう。

障害をもった子どもは、しばしば、物をとられても、とり返さない。子どもによってはとられたことから生じる自分の中の空虚な部分を、空虚なままにしているのではないかと思われる。とり返す力もなく、喪失感を理解してくれる人もいないとき、子どもはひとり空虚なまま、みんなの中でたたずんでいるのではないか。

T夫の行動は、この点で一步積極的である。

他方、この電車をとっていったH男は、他人の物をと

る意図をもっていたのではない。H男にとっては、たまにたまそこに置いてあった電車をとって遊んだのである。

同じ電車でも、H男の場合は、T夫にとつての意味とは違う。彼は電車に鉛筆で何かをかき、印をつけた。日頃は、H男は、大人にマジックを持たせ、壁に字を書き並べさせることが多く、自分の手で電車に書くのはめづらしい。彼の心にも、何か新たな動きが生じているのだろうと思われる。それが何であるかは、多くの特異な行動をする彼の他の側面をあわせて考えてゆかねばならない。

この場面で、最初からT夫と一緒にいた私は、H男が普段とは違った、意味のあることをやっていることはわかって、それ以上にかかわることができない。こまかい配慮を要する複数の子どもを保育するときの大人の側の悩みである。

髪を引張ること

S夫は、小さい子どもを見ると、すばやく走っていっ

て髪を引張る。そのことが、子どもたちや大人たちの間に波及的影響をひき起す。この日、はじめは何事も起らず、いい工合だと思っていると、(こういう思い方が実は問題の端緒をつくっているのだが)突然(と私には思われた)S夫はT夫の髪を引張り、私はT夫をかばうことになった。そのあと、T夫は私にくっついて離れなくなった。

私がT夫と親しそうに一緒にいたことが、S夫に髪を引張らせるきっかけとなった。この場合、むしろS夫に十分な保育をせねばならないとわかりながら、引張られる緊張した葛藤場面では、ただちにそれはなしがたい。ここにも複数の子どもとかかわる大人の悩みがある。場面をかえ、日をあらためてなされなければならない。このことについては、後に詳しく考察してゆきたい。

自己実現させることのできない保育の一月

自分がかかわることによって、子どもが自己実現するのを体験するのが保育者である。それに対して、だれも

が十分にあそぶことができず、混乱したまま一日が終るとき、それは保育といえるのかという疑いが生じる。

そして、その一日を共に過した保育者は、外的な混乱に直面するのみでなく、内的にも、おちこんだ気持ちになる。

こういう日のことを考えてみると、保育の場には、保育者の能力の範囲をこえて、自己実現を妨げる。外的内の諸力がはたらいっているように思われる。物をとられ、物を取り、髪を引張って、活動を妨害する。そのいずれの子どもも、自分で満足する活動をしたいと心の奥で望んでいることは明らかであるのに、それにはまだ多くの人の助力を必要としている。しかも、現実の場では、保育者の範囲をこえて、相互の葛藤によって、皆が苛立つてしまう。

すでに数ヵ月を経た現在の時点からふりかえてみると、混乱の日があることも、保育の全体のひとつの過程であることが認識される。保育者の力をこえてはたら

く、保育の場を破壊する諸力によって、外部の状況も、保育の内面も混乱する時期があることは避けられない。その混乱の時期をのりこえることが、保育者としての成長のための基本的体験のひとつであると思う。育てる人は、事態がどんなに悲観的に見えようと、どの子どもにも、建設的に自己実現する力が備えられていることを信じてゆくほかない。

混乱をのりこえる基本的体験は、子どもの成長の過程で、二、三才の時期になされる。そのときには、保育者に助けられ、支えられて、それが可能になる。その体験は、成長の各段階で、新たな生活の場で反復される。そして、その人が成人して保育者になったときに、人は混乱の時期にある子どもを支える者となることができる。

保育者は、実践の過程で、混乱した一日も、全体の過程のひとつの段階であるという眺望をもつことができるようになる。それは、日日の保育の現象を通して、人間の理解を深めてゆくことにより、一層、確実にされる。

えのぐをぬりたくる

新学期が始まって数日後の朝、T夫は、また棚の上に電車を並べていた。S夫はそれを見て走り寄り、髪を引張り、足でけとばす。T夫は私の背中にしがみついたはなれない。私はT夫をつれて別の部屋にゆく。電車の絵本が開いていると、私の背中からおりて、それを見る。

最後に、電車の絵のかいてある裏表紙を破り、放り投げた。それは、何度も遊びを中断された電車を拒否しているかのようにみえる行動であった。そして、他の子どもが傍に近寄るだけで、私にしがみついた。

しばらくして、T夫はおしっこにいきたくなり、便所につれていった。そのとき、別の部屋の流しに絵のぐのびんが出ているのが見えた。T夫はそこにゆき、びんに手をいれ、えのぐを両手にぬりたくりはじめた。これはT夫から出た自発的な行為である。私は少し離れて見ていることができた。T夫は水を出し、びんに水をいれ、色水をつくる。同じ水道の蛇口で、別の子どもが水で遊ん

でおり、しばらくは共存していた。机の上に違う色のえのぐのびんが置いてあり、それを二度ほど取りにくるとき、ときどきひとりで笑っている。えのぐを手になりたくり、色水をつくることに快感を感じているのだろうか。

えのぐは、T夫の心をひきつける物質のようである。色のついた半液体は、ぬるぬると身体に付着する。それが体についても、T夫は氣にかけない。大人の場合には、半液体の物質と自分の身体との間には、はっきりした境界を設けて、ねばつく物質を排除する。T夫にはそのような氣は起らない。

T夫は前から水に対して関心をもっている。じょうろには特別な関心がある。以前からそうであるし、このころも、じょうろを見るときつと取りにゆく。じょうろの先から出てくる水は、自分の体内から出る排泄物と判然とした区別がないように思われる。

いま、えのぐの不透明な粘着力のある物質をいじるとき、あの哺乳びんをくわえているときの感覚に似た自己愛的快感を味わっているのではないかと思う。

しかし、いまや、T夫はその快感の中に閉じこめられているだけではない。机の上にある別の色のえのぐのびんに目をつけて、そこまで歩いてとりにゆく。異った色の多様な外界を、自分の感覚と結合し、新たな物質の感覚をつくり出している。自分の快感の感覚を、多様な外界にひろげる外向的積極性が生れている。

何度も他の子どもに遊んでいた物をとられ、活動を妨げられながらも、自分で何かをしようとするT夫の自発性は窒息させられることはなかった。新学期のはじめ、自発的な心が動きはじめたときに、動く電車に関心をもったが、その後の活動の内容は、電車である必要はない。むしろ、その子どもにこれまで形成され、今後に発展の可能性をもつ独自の精神の内容によって、その活動は選択され、発見されてゆく。

この日、その後の時間、T夫は、自分のクラスで弁当をたべ、機げんよくあそんで良い工合だった。この後も、S夫に髪を引張られると、そのときは活動が中断し、大人にくつつくが、S夫が去ると、怒りを表現す

る。

T夫は、複数の子どもの中で、自発活動を妨げられながらも、それをのりこえて自分で活動する体験を重ねつつある。また、それらの複数の子どもたちの中にあつて、そこに生じるさまざまなできごとが、子どもの成長にとってプラスの体験となるように転換させてゆくのが保育である。ときによって、困難があまりにも大きく見えることがある。直接の保育担当者だけでは解決できない部分もある。保育の場の外にいて、保育を理解し、力づけてくれる大人が必要なのである。

(愛育養護学校)

